



幼児の世界に ICT



ソニー教育財団から 2020 年度ソニー幼児教育支援プログラムで優良園に選定されました。応募した論文は昨年度から幼小連携に ICT を積極的に取り入れたり、今年度、YouTube や iPad を活用したりした子どもの姿をまとめました。その論文の中から、少し紹介します。

4 歳児○ちゃんは、臨時休園中、祖父母の家で過ごしていました。幼稚園に来ることができない中、お家の方が幼稚園のホームページを見て、エールプロジェクトに参加してくださいました。「外から帰った時、人と会う時、手洗い、マスクをしよう」というポスターのようなものを親子でつくったのを投稿されました。幼稚園の保育再開後、登園してきた◇ちゃんが手洗いをする時、先生が「お家でも手洗い、頑張ってたんやなあ」と声をかけると久しぶりの登園で緊張気味ではあったけれど、手を洗う姿は得意気でした。

ホームページを見て友達の作品に触れ、自分もやってみようと思ったり、遠く離れた幼稚園の先生が自分の思いをしっかりと分かってくれていることを感じたりしています。そして何より社会状況を自分なりに感じ、自分ができること（手洗い）をし、健康に気を付けられたことが子どもの学びとなりました。先生も会えなかった間の様子を知り、再会後の成長を喜びました。

3 歳児◇ちゃんは、七夕飾りのつくり方を家で YouTube で見て、お家の人と一緒にスイカをつくりました。翌日、幼稚園で先生に「難しかったけど、先生見てお母さんと一緒につくったの」「先生見たよ」と嬉しそうに伝えます。そして、製作コーナーへ行き、材料を選んで、「見て！こんなスイカもできたよ」と自分なりに工夫してスイカをつくりました。そして先生と一緒に幼稚園の笹に飾りました。

幼稚園からの YouTube を家庭で見ると自分の先生がそこに現われ、身近に感じられ、お家の人と一緒に作る意欲に繋がっています。また、さらに翌日、幼稚園での遊びに繋がり、先生と思いを交わしながら自分がつくったことに満足感をもつことができました。

幼児期は、バーチャルの世界より、直接体験が大事です！画面ばかり見ていると目が悪くなります！等お話することも多かったです。赤ちゃんがむずがる時等、すぐに携帯電話の動画を見て泣き止んだり、静かになったりする場面もよく見かけました。どちらかと言えば、ICT 機器は幼児期には、取り入れなくてもよいのではないかという思いをもっていました。また、社会では、便利ではあるけれど、危険なことも危惧されています。しかし、このコロナ禍において、会えないけれど心はつながっていたい、今、詳しく、わかりやすく伝えたい等という私たちの困りや願いに ICT 機器は応じてくれました。さらに、今、目の子どもたちが、成長すると Society5.0 の世界、AI が活躍する世界となります。

文部科学省幼稚園教育要領には「幼児期は直接的な体験や重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピューター等情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完する等、幼児の体験との関連を考慮すること」とあります。幼児期にどのように ICT 機器と出会うか、どのように生活に取り入れるかということが大きな課題です。○ちゃんの場合は知っている友達の様子や幼稚園の先生を思い浮かべての心のつながりです。◇ちゃんはお家の人と一緒に見るからこそ、お家の人と幼稚園の先生と思いを通わせ、意欲につながっていきました。子どもたちの心や体のことを考慮し、学びに繋がるように、これからも幼児の世界の中での ICT 機器の存在を考えていきたいと思えます。